

ひと

なつかり いくこ
夏苺 郁子 さん(63)



幼い頃の記憶に刻まれた亡き母は、般若のような恐ろしい顔。奇声を上げて歩き回り、たばこをふかしながら趣味の小説を書いていた。「人が壊れていくってこういうことか」。幼心に思った。

10代後半で両親は離婚し、母とは断絶。いじめっ子を見返す一心で医師を目指したが、大学へ入ると反動が来た。アルコールやたばこの過剰摂取、摂食障害、自殺未遂。精神科に通い、服薬のつらさも味わった。教授に声をかけられるまま、精神科医になった。

回復を支えたのは、「医療ではなく人の力だった」。前向きに生きる親友、母との再会を後押ししてくれた人。精神科医の夫と静岡

県焼津市で開業し、2人の息子を

育てた。55歳の時、同じように母が統合失調症の漫画家の作品に出会い、それが転機に。「医師だからこそできることを」。母の病気と自身の体験を公表、全国から講演依頼が届くようになった。

診察室を出て「心の病は医療だけでは治せない」と痛感する。悩む人たちの助けになればと、自身の歩みをつづった「人は、人を浴びて人になる」を8月に出版した。患者、家族、医師。三つの世界の橋渡し役を目指す。

母は晩年、俳句に没頭した。「生か死か二つに二つ隙間風」。作品を通して浮かぶのは、誇り高く生き抜いた姿だ。母は「世界一尊敬出来る人」になった。

文・写真 仲村和代